2）滝川市立明苑中学校

「地域社会の一員としての自覚を芽生えさせる廃品回収の取組」

報告者：北海道社会福祉協議会　福祉教育専門委員　久保　大輔

・視　察　日　時：平成30年12月14日（金）10:00～12:00
・視　察　場　所：滝川中央保育所
・懇　談　場　所：滝川市立明苑中学校校長室

○　学校の概要

滝川市立明苑中学校は、旧明苑中学校、東栄中学校、江陵中学校の一部を統合して新設され、市の文教地区に位置している。市文化センターや図書館、郷土館等と隣接し、文化的に恵まれた環境にある。また、JR 滝川駅まで２㎞にあり、交通の便にも恵まれている。

校舎は、昭和55年４月８日に開校、同年５月12日に落成式典を挙行し、昭和60年３月に器楽室、多目的室、普通３教室を増築した鉄筋３階、屋上完備の近代的校舎である。平成29年11月11日には創立70周年を記念し、式典及び祝賀会を行った。

生徒の通学区は広範囲で、東滝川地区の通学生のためにスクールバスが配置されている。保護者の職業は、会社員、自営業、公務員、運送業など多岐にわたり、経済的にも比較的恵まれている。近年は、大型商業施設が進出し便利になった反面、校区においても、市内外への人の出入りが多くなっている。

生徒は、一般的に明るく社交的ではあるが、一方で、粘り強く追求する態度や厳しい自己制御などに欠けるところが見られる。また、近年は、人間関係に悩み、不登校傾向になる生徒もおり、生徒指導の課題となっている。高校進学率は、ほぼ100％であり、生徒の進路を含め、教育全般に対する保護者の関心は極めて高く、学校に対しても協力的である。

（滝川市立明苑中学校「学童･生徒のボランティア活動普及事業協力校視察説明資料」より）

○　事業の概要

滝川市立明苑中学校３学年では、生徒が廃品回収活動で得たお金で、市内の保育所及び幼稚園７カ所に、絵本やおもちゃを寄贈している。生徒は、校区の住民に１人40枚程度のチラシを配布し活動を呼びかけ、おもに、新聞紙やアルミ缶を回収している。

平成30年度の廃品回収で得た総額は139,800円で、１カ所あたり約２万円相当の絵本やおもちゃを市内の保育所及び幼稚園７カ所に寄贈することができた。寄贈は、保育所及び幼稚園に何を寄贈するか事前に選んでもらい、近隣の３カ所については、代表生徒が訪問し寄贈している。

本事業は、生徒が住民と関わることで活動の意義を実感するとともに、地域に密着した活動となっており、今後は、全校生徒と本事業の取組を共有したいと考えている。

当校では、このほかにも高齢者宅の除雪や雪まつりへの参画を行っている。

○　視察内容

廃品回収活動で得たお金で購入したおもちゃを生徒３名（３学年学級委員長）から園児に贈呈する様子を滝川中央保育所において視察した。クリスマス前ということで、サンタクロースに扮した生徒が代表園児におもちゃを寄贈した。園児からは中学生にお礼があり、保育所職員からは園児に仲良く大切に使うよう促した。

視察後は、事業の概要等を聴くため、中学校において贈呈した生徒を含めた懇談を行った。

○　懇談内容

・教頭から学校の概要について説明。
・事業の担当教諭から事業の概要について説明。
・以下、懇談

（委員）

このような取組において地域と関わる中で、自分自身にどのような変化がありましたか。

（生徒）

・地域での活動範囲が広がった。
・地域において新たな気付きや発見があった。
・地域をよく知る機会となった。

（委員）

中学校を卒業し高校生になったら地域において自主的に行ってみたいことはありますか。

（生徒）

・地域の活動に協力したい。
・地域で行われているゴミ拾いや雑草取りに積極的に参加したい。

（学校からの課題）

・授業時間数の確保により、生徒の学校生活は忙しい。
・そのような中で、地域との関わりや異世代交流を行う時間を確保するのが難しい。
・活動まで準備に要する時間が多く必要である。

（委員）

・学校においては、時間の無い中で様々な活動が成されており、地域に積極的に関わっておられる中、地域住民が学校（生徒）を支援する意識が高まっていくことに期待したい。
・学校の取組として学校だけで活動していくには限界があるので、行政や社会教育団体等を活用し、学校と地域をつないでもらうことも可能性として考えてみてはどうか。
・平成32年度から社会教育士の資格が講習を受講すると取得できるようになることから、先生方にも是非、社会

教育主事講習を受講いただき、学校と地域をつなぐ役割を担っていただきたい。

（同行した滝川市社会福祉協議会会長）

・明苑中学校は過去に「滝川の学習院」と呼ばれていたほど、伝統のある学校。

・生徒も先生もそのプライドを持ってこれからも地域づくりに取り組んでいただきたい。

・皆さんの取組は、必ず、住民が地域を見直すきっかけとなり、住民が自ら地域づくりを学ぶようになると考えている。

○　**感想と考察**

今回の視察では、学校が地域住民の理解と協力を得て、地域に貢献している子どもたちの活動の様子を伺うことができた。

明苑中学校は、統合する前の旧明苑中学校時代を含めると、昭和22年から地域に根付いている伝統ある学校で、これまでも様々な方法で地域に目を向け、地域に愛され、地域とつながって来た。生徒が積極的に自分の住む地域について考え、地域づくりに参画していくことは、学校においては社会で生きる力を育てる上で、地域においては、持続可能な地域づくりを行う上で、大変重要である。

３年生が行うこの取組は、校区の住民にちらしを配付し廃品回収を行うことで、地域からは学校の教育活動が見え、地域全体で子どもたちを守り育てる住民の機運の醸成につながり、学校においては地域に支えられながら教育活動の充実を図ることにつながるものと確信している。

そのような中で、本取組には、教育課程との関わりから活動に要する時間数の確保に課題がある。その背景には、本活動が学校の教育活動の一環として行われているという認識が強く、地域は単なる受け皿であるにしか過ぎないからである。こうしたことから、何から何まで全てを学校のみで取り組んでいくのではなく、今後は、地域がもっとこうした学校の活動を支え協力していく必要があり、そのためには、本活動を地域住民にもっと知ってもらい理解してもらうことや、活動に対して興味・関心を持ってもらえる工夫が必要である。地域づくりや住民の活動を支える行政や団体、あるいは、平成32年度から取得可能な社会教育士の資格を有する学校の教員が住民とのパイプ役となり、地域が学校のこうした活動に対してどのような支援や協力ができるか、更には、目的を共有したうえで、地域づくりに学校と地域が一緒に取り組めることはないか探っていくことが重要であると考える。

今後、明苑中学校のこの取組が地域に理解され、住民が積極的に支え協力し、更には同じ目的を持って共同する活動となることを期待したい。